

# 2016 年度 センター試験 日本史B (本試験) 分析

## 全体概況

試験時間 60 分

大問数・解答数	大問数：6 題	解答数：36 問
難易度の変化（対昨年）	○ 難化    ○ やや難化	○ 変化なし    ● やや易化    ○ 易化
問題の分量（対昨年）	○ 増加	● 変化なし    ○ 減少
出題分野の変化	○ あり	● なし
出題形式の変化	○ あり	● なし
新傾向の問題	○ あり	● なし

### 総評

2006 年度入試以来、大問1(12 点)、大問2(18 点)、大問3(18 点)、大問4(17 点)、大問5(12 点)、大問6(23 点)の配点比率が続いていたが、本年度入試からは下記の「大問別分析」の通り配点に変化した。また、時代背景や時代一致を問うような問題がほとんどなく、人名や用語を覚えていれば答えられる問題が多かったのでやや易くなった。一方、形式には新課程導入の影響は特になく、ここ数年出題されていたグラフの読み取り問題が出題されなかったことを除いて、写真(5 点)、史料(5 点)、地図(2 点)など従来通りの出題であった。なお、戦後史は昨年同様 2 題と変化はなかった。

## 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	史料としての日記	16 点	学生の日記を題材とした出題で、定番の会話形式からの出題ではなかった。ここ数年第 1 問ではグラフや地図を読み取る正誤判定問題が出題されていたが、今年度はみられなかった。問 3 と問 5 の 4 択正誤の各選択肢の文が原始～戦後までまたがっていたのが特徴的であった。
第 2 問	原始・古代の漆と香の文化	16 点	漆と香の文化という特殊な題材の問題に受験生は触れたことがないと思われるが、問われた用語は標準的なものであった。史料の読み取りが 2 問出題された。いずれも未見史料であるが、注釈を利用して訳せば、容易に解答は導き出せた。
第 3 問	中世から近世初期の政治・社会・文化	16 点	中世から近世初期の政治・社会・文化の多岐にわたる標準的な問題であった。『一遍上人絵伝』や『蒙古襲来絵巻』といった頻出図版が出題された。第 3 問の中世分野においては特に文化史からの出題が多いのが特徴である。
第 4 問	近世の政治・社会・文化	16 点	地図と未見史料の読み取りが出題された。近世の特産品と産地の地図問題は頻出である。昨年同様、江戸時代中期～後期にかけての出題が多かった。19 世紀の対外関係からの出題は例年の定番である。
第 5 問	明治期の地方制度	12 点	明治期の地方制度を題材とした政治中心の問題。例年 1900 年代までにまたがる明治期を扱った問題が出題されていたが、本年度は 1890 年までという狭い時代が取り上げられた。また、経済史や文化史ではなく政治史からの出題であったため、高得点を狙える問題であった。
第 6 問	日本とオリンピックのかかわり	24 点	日本が参加したオリンピックを題材にした問題。オリンピックの内容そのものよりも開催時の国内外情勢に関する出題であった。問 2 の図版問題は未見であるが、図版内に書かれている用語を見つけだすことができれば容易に解答できた。戦後史は農地改革や高度経済成長など頻出分野が出題された。